

今朝は、コロサイの信徒への手紙 3 章からみ言葉に聞いてまいります。コロサイという町はギリシャの海（エーゲ海）から 200 キロ程内陸に入った小アジアの都市のひとつであります。コロサイは、エフェソから東方に通じる商業道路沿いに位置する町でした。この地域には二つの川が合流する谷があって、周辺には豊かな牧草地帯が広がり、この谷をはさんで、ほかにラオデキア、ヒエラポリスなどの裕福な町があったことが知られています。コロサイの教会は、パウロ自らが立てた教会ではなく、パウロの弟子であったエパfrasが、パウロがエフェソに三年間滞在していた間に立ち上げた教会でした。このエパfrasが、同じ時期に近くの町ラオデキアの教会も、開拓によって立ち上げたものとみられています。

パウロが、自身の伝道旅行で訪問したギリシャおよび小アジアの地域は、当時ヘレニズム文化の影響下にありました。ヘレニズムとは「ギリシャ風の文化」とか、「ギリシャ主義」という意味です。この文化を担った当のギリシャ人たちは自分たちのことをヘレネス（ヘレンの一族、の意）と呼び、ギリシャ民族こそ優れた思想や文明の担い手であると考えていました。そのことが福音を伝えるのに有利に働いた面もあります。それは、当時の地中海圏ではコイネーと呼ばれる共通言語が使われ、新約聖書もコイネー・ギリシャ語で書かれているのですが、そのギリシャ語が公用語となっていたことで、どこででも伝道ができたからです。言葉の壁がなくなっていたことは、キリスト教を広めるうえで大変なアドバンテージでした。しかし、その反面、このヘレニズム文化は、新旧約の聖書を生んだヘブルの文化とは真っ向から対立するものでした。聖書は唯一の神を説きます。偶像の神を拝むことを厳しく禁じます。そして、高い倫理を人々に求めます。ところが、ギリシャ人はそうではありませんでした。彼らは神々が人と同じように神話の世界で踊ると考えていたのです。壮大な神殿や彫刻によって、神をかたどるということを当たり前のように行っていました。さらに、その神殿には娼婦たちが仕えていたのです。加えて、ギリシャ人は外国人のことをバルバロイ（未開人）と呼んで見下していました。この言葉は英語の barbarian（野蛮人）の語源になっている言葉ですが、そのようなヘレニズム文化がひろく支配、浸透している地域に、イエス・キリストの福音を伝えるという作業は、まことに困難なことでありました。我が国でも、古くからのお寺や神社信仰の強い町で、キリストの福音を伝えることは今でも大変ですね。パウロの時代も同じでした。

このような伝道上の困難を抱えながら、それでもギリシャの各地で、教会が立て上げられたのはなぜでしょうか。それは、新約聖書の教えが、民族や文化の壁を取り壊し、伝道の妨げとなっている障害物を取り除いたからです。聖書が語ることを、だれもが信じて従うことができる、そんな普遍的な教えを説いたのです。どのような壁が取り除かれたのか、いくつかあります。第一は、国民、民族の壁を取り除いたということです。そこにはユダヤ人とギリシャ人の壁はありません。第二は、男女の壁を取り除きました。わが国でも、初の女性首相が誕生しましたが、旧約聖書の時代、女性は人数にも数えられないほど弱い立場に置かれていました。しかし、初代教会はそうではありませんでした。フィリピの教会でもコリントの教会でも、女性が指導者となり、女性がパウロの伝道を助け、男性はそのような女性を支える側にまわったことが聖書から読み取れます。男女の機会均等は、2000 年前の教会ですでに現実の事柄になっていたのです。第三は、キリスト教会は、この世の身分や階級の壁を打ち壊しました。たとえば、こういことです。当時のギリシャには一般市民のほかに大量の奴隷がおりました。戦争の捕虜として奴隷になったり、借金を返すことができずに身売りして奴隷になったりした人たちが数多くいました。ギリシャでは自由人よりも奴隷の方が、数が多かったと言われます。その彼らが、福音を受け入れ、信徒となって教会で奉仕を始めます。礼拝での説教や司式を務めたり、賛美の指導をしたりする。そこに、自由人で信徒となった人があとから加わるとどうなるか。社会的な身分は脇において、後からきた彼らが生徒となり、奴隷が先生となって、彼ら自由人の指導をするわけです。そうすると、教会では立場が逆転します。神の前では、社会的な立場や階級による違いなど吹き飛んでしまうのです。それは、実際にしばしば起こったことでした。

本日の箇所の前段の段落、2 章の 10 節以下でパウロは「古い人をその行いと共に脱ぎ捨て、新しい人を身に着け」なさいと言います。「もはやギリシャ人とユダヤ人、割礼を受けた者と受けてない者、未開人、スキタイ人、奴隷、自由な身分の者の区別はありません。キリストがすべてであり」という言葉が、それに続きます。新しい人を着るとは、古い自分に死んで生まれ変わることです。キリスト者とは、そのような新生の命に生きる者です。私ごとで恐縮ですが、昨年 6 月に私どもに初孫が生まれました。次女が出産した産婦人科には、生まれたばかりの赤ちゃんが着る衣服が用意されていて、写真に写った孫は毛糸のセーターにくるまっていた。まるで、芋虫のような格好で写っているその顔写真を見て、私どもは思わず笑ってしまったのです。生まれたばかりの赤ちゃんが何を着ればいちばん可愛く写るか、それは決してどうでもよいことではないように思われます。

ところで、聖書が新しい人を着なさいと説くとき、そこにはもう一つのメッセージが込められているように思います。それは、単に見栄えではない。その人の心の中まですっかり変わる、いわば生き方が変わるほどの心の変化が起こることです。キリスト者として新しい歩みをスタートした。それによって、私たちは変えられるのです。も

しも、何も変わることがなく、キリスト者となってもすべては昔のままというのでは意味がありません。信仰を持つことで人生が変わるはずです。昨年のイースターにバプテスマを受けたご婦人と、先日お話をする機会がありました。今は、毎日が感謝と喜びだといいます。こんなことなら、もっと早くバプテスマを受けていればよかった。一体、これまでの人生は何だったのかと思うほどです、と彼女は話されました。そうなのです。信仰をもつと新しい人生が始まるのです。

そのような新しい命に生きる者が、信仰者として身に着けるものが五つあるとパウロはいいます。第一は「憐れみの心」です。もとのギリシャ語には「はらわた」という言葉が使われています。はらわたが干切れるような思いになるということです。キリスト者は、ほかの人の悲しみや痛みに深く共感し、共にその痛みを担い合うのです。群馬県の元公立中学校の教師で、不慮の事故で手足の自由を失い、キリストによる信仰を与えられた後、僅かに動く口に筆をくわえて花の絵と詩を描き続けてきた星野富弘さんという人がいます。群馬県みどり市に美術館があつて、私も教会の方々とその美術館を訪ねたことがあります。この人の詩画集に次のような詩があります。「よろこびが集まったよりも、悲しみが集まった方がしあわせに近いような気がする。強いものが集まったよりも、弱いものが集まった方が、真実に近いような気がする」人間は本質において決して強くないと星野さんは看破しています。その弱さを共感できる心を持つことが大事なことだと、聖書はいうのです。

第二は「慈愛」です。もとのギリシャ語（クレーストステース）は「親切心のある優しさ」を意味する言葉です。これは、「思いやりのある優しさ」とも言い換えることができます。主イエスは単に優しいだけの人ではありませんでした。慈愛のある優しさの持ち主でした。新約聖書、マタイによる福音書 11 章に「すべて重荷を負うて苦労している者はわたしのもとに来なさい。」という有名なイエスの言葉があります。そのあと「わたしのくびきは負いやすい」と続くのですが、実は、この「くびき」にここの言葉が使われています。「わたしのクレーストスは負いやすい」とイエスは言われるのです。くびきとは、イスラエルで二頭の牛に畑を耕やさせるために、その二頭の牛の首を結びつける棒状の器具のことです。そこから分かることは互いに重荷を負い合うという精神が、本日の箇所の「慈愛」という言葉の根底に流れているということです。

第三は、「謙遜」です。この謙遜と訳されるギリシャ語は、新約聖書の中ではじめて登場する言葉で、古典ギリシャ語にはない言葉であると言われます。聖書によつてはじめて注目されるようになった言葉だということです。古典ギリシャ語には「謙遜」という言葉がなかったということです。キリスト者の謙遜は、どこから来るのでしょうか。二つあります。一つは、垂直方向に思いを巡らせるときに感じることです。人間は神に造られた被造物に過ぎないということ、天におられる神さまの手の内にある小さな存在だという認識から生まれます。二つめは、水平方向をみて感じることです。すべての人間はみな神の子とされている、という信仰です。だれもが、罪を赦され救いに入れられることで、等しく神の子とされるのです。私たちが皆神の子であるなら、私たちの父親は同じ一つの神です。すると、私たちは兄弟姉妹ということになります。傲慢の入る余地はなくなる。垂直方向をみても、水平方向を見ても、私たちは、自分がおごり高ぶることなどできない存在であることを悟らされるのです。

第四は柔和です。自己制御ができるという意味です。まったく怒ることをしないという意味ではありません。そうではなく、怒るべき時に怒り、怒るべきではないときには怒らない、その判断が正しくできるという意味です。強さと同時に、柔和から生まれる優しさをキリスト者は持つのです。

そして、最後の五番目です。寛容と訳される言葉です。もともとの意味は、「怒ることに対して大きいこと」という意味です。（マクロテューミア；ギ）何が大きいのかといいますと、時間が大きい。つまり、怒る前に十分な時間をかけること、という意味になります。私たちの周りには、ヤコブ書の 1 章で言われていることとは反対に、怒るのに早い人がいます。（ヤコブ書は、「怒るのに遅いようにしなさい」と勧めています）瞬間湯沸かし器のように、すぐ熱くなる。しかし、本日のコロサイ書では、怒る前に十分な時間をかけることを求めます。怒りを先に延ばす、すると怒り方まで変わってくる。穏やかになってくるのではないのでしょうか。新約聖書ではそれを寛容と訳しています。

これらすべてを通して示されること、それはキリスト者は自分だけよければ他はどうなっても構わない、知ったことではないという生き方をしない人だということです。そこから「平和」が生まれてきます。なぜなら、平和はお互いが相手の幸せのために歩み寄るところから始まるからです。互いに愛し合うとは、互いの足りない処を補い合うことです。その愛の思いをもって、新しい年も赦し合いながら歩んでゆきたいと思います。お祈りいたします。